

○玉鳳院〔法堂の東の方南面なり〕初め此所花園法皇宸居の御殿なり、崩御の後院号を釘し、宸書の尊影を安置す。南

面に唐門あり。〔寺説云、大坂淀屋右衛門太郎金を散じてこれを建る〕

麟徳殿〔当寺の方丈をいふ、唐憲宗帝の營たまふ名義を摸す。初め此地に麒麟閣あり、此名義は漢宣帝功臣を麒麟閣

に囚し、雄名を賞す、漢書の註に麒麟閣は蕭何が造る所にして秘書を蔵む〕

麟徳殿〔東の間、山水。中の間、龍。西の間、桐に鳳凰。永徳筆〕

法皇宸影間〔法皇宸筆額、玉鳳院と書す、横額なり、唐戸の上に掲る〕

花園法皇宸影〔坐像、法服色薄萌黄、袴千種色、飛紋八ツ藤、右に念珠、左に扇子、御長式尺七八寸許〕

後屏には三片の囲屏あり、縁黒漆、地板金濃、前には段階三級、黒漆長押の上■花菱金濃、其四方は黒縁、其下に唐

戸四枚、地黒漆にして鈿螺をもつて画を作る、四幅対の如し。諺に云、此唐戸は唐玄宗皇帝の寢殿の具なりと云伝ふ。

戸の内に水引あり、花色地の錦、中央に紅の華鬘を掲る。其内陣に宸影を安置す、右の間の口式間の外に左右南面に

一間の壇あり、内金濃、口黒漆の障子。其東に安ずるは將軍家御代々神牌、西の壇には祥雲院殿画影。〔童男白衣、

坐像、これは秀吉公の御子棄君の影像なり〕信長公、信忠公、秀吉公、武田信玄等の牌を安ず。両壇の前、中央に紫

銅二重宝塔あり。〔高さ三丈許〕其中に唐木の〔色薄黒くして晒木の如く作りたるなり〕面に南無観世音菩薩の文字

あり、此字は後水尾院の御爪にて、南都円照寺宮文守尼公の御細工なり。〔此尼公は後水尾帝等一の皇女、御母一位

局四辻大納言公遠卿の女なり」又後水尾帝御鬢水入をもつて此仏号の後光に准じ給ふ。

○拈華室、此所法皇の玉座なり。「右方丈東壇の東方式間の御間」額、拈華堂「横額、雪江和尚筆。当山六世なり、間の口南面長押の上に掲る」間の内北の壁東の方に寄せて床あり、金張附、画は萩、芙蓉、右の方袋棚、画は枇杷、桃、柿、葡萄。「益信筆」其下違棚「金具黄金」中台厚畳、上に褥ありこれ宸座なり。

○開山堂「方丈の東にあり」額、微笑庵「横額」雪江筆「開山の像を安ずる所は別に作つて、北の方に退く事式間、其東の側西向に壇あり、碑の如きの板高サ五尺許、亀に立る。これに開山国師の行状記を彫刻す。其北高サ三尺段階四級、欄干葱宝珠共に黒漆、内戸張水引紺地唐織、中に紅の華鬘をかくる、内の中台高サ三尺、うしろに囲屏三枚をたつる、高サ六尺許」

関山国師像「長三尺余、椅子にかくる、法服青地飛紋の純子、手に竹藁を持。此像を彫刻の時化人來つて国師の頭面を与ふ、其面貌生るが如し、何れの人の作りたる事をしらず、自然の出現にして靈物なり。影前に毎朝手水を典へ、又菓子鼻紙を供ず」

一 休拝関山塔頌

荒草不鋤乃祖玄。 涅槃正法妙心禪。

杜鵑叫落関山月。 誰在華園躑躅前。

○涅槃堂〔同所東の方西向にあり、小堂内敷瓦〕紫銅涅槃像〔長三尺許、像面世にある画像の如し、人面みな滅金をもつて彫。傍に祖師の牌を安ず〕

○祥雲院殿魂舎〔同所の西の方南面にあり〕棄君像〔長壹尺五寸許、白衣を着し、船に乗ずるの像を安置す。此船は棄君平生玩弄給ふ具なり。伝云、棄君三歳の時、伏見城中池の面に此船を浮べ遊び給ひて、終に墜溺して葬れ給ふなりとぞ。祥雲院殿玉巖麟公神童と号す。秀吉公の御子にして秀頼公の御舎兄なり、名を八幡太郎と称す、御母は浅井備前守長政の女にして秀吉公の妾とし、棄君を産、石河伊賀守をもつて傳とし給ふ。秀吉公五十歳を逾たまひてはじめて棄君を得給ふ、懽悦酷だしうして寵大かたならず、海内列国の諸侯前後を争ふて祝賀を献ず。祥雲寺初めは東山の麓、大仏殿の南、今の智積院の地なり。棄君早世の時御菩提所として、秀吉公命令を下して營建し、南化和尚を請じて住職とし給ふ。南化入寂の後、其蔵主に附す。此其蔵主といふは織田常信の子にて、秀吉公の門族なり、此人年弱して南化の法子海南こゝを伝ふ。海南祥雲寺を奪ふて自住の逆意あり、妙心寺の南化派起つて海南点擯し退去なさしむ。其蔵主も法嗣立がたくして遂に還俗す。於レ是祥雲寺空席となりしかば、関東將軍家の嚴命ありて、禪宗を變じて真言新義の本寺を再興ありて智積院と改む、故に祥雲院を妙心寺に移して、棄君の遺物妙心寺宝庫に蔵るなり〕

○風水泉〔玉鳳院にあり、名泉清潔なり〕

○信長塔○信忠塔○武田信玄塔○同勝頼塔〔信玄四男〕○信勝塔〔勝頼一男〕

○信豊塔のぶとよの
〔信玄弟信繁しんげんの子、左馬助のぶしげと号す〕